

## 本物の「大学人」になろうと思った日

楯 一也

### ● 卒論集の思い出

年が明け、卒業から入学と目まぐるしく時が流れるときに、ふと物思いにふけてしまうときがあります。入試の時期には合格したときの自分。卒業、入学と来るとまた学生をやり直したいと思ってしまう。

また、学生たちにとっては大事な入試の時期を迎えても、大学の経営者のように志願者ばかり気にしてしまいます。

今から二年前。ゼミの委員長の発案で卒論集を作ることになりました。彼が卒業の記念にどうしてもと力説していたのです。卒業までは気にならなかつたのですが、今ではことあるごとに読み返し

てしまいます。

在籍していたゼミは、担当教授が半年でリタイアするというアクシデントに見舞われたいわく付きのゼミなのです。リリーフとしてお世話していただいた教授が卒論集のなかで次のように記されたことが、強く印象に残っています。

「若者群像を説明しようとした論文には、自らの世代の問題でありながら、見事な客観性をもった視点で貫いているのがみられ、改めて『近ごろの若者は』なんて軽はずみにいえなくさせる力を感じました。」

### ● 学生とのギャップに悩む毎日

現在、図書館のカウンター部門に勤務しています。信じられなかつたのは、館内で食事を平気でしたり、菓子の包を燃やして遊ぶ輩がいたことです。自分もちろん若い世代ですが、いつたい彼らは何者なのかとギャップに苦しんでいます。なぜ自分はこのようなことが起こる

「変な」ところに配属されてしまったのだろう。ゴミひろいのために就職したんじゃないのに……。

教育を支援する立場にもかかわらず、彼らを恨んでいる自分に気づき、自己嫌悪に陥ってしまうのです。そんなおり、先述の卒論集を読み返し、恩師の言葉にたしなめられる思いをしました。

振り返ってみればつい最近まで、自分も彼らと同じようなことをしていたと思います。授業中しゃべっていて、出ていきなさいと怒られたり、図書館の本の貸出期限がかなり過ぎて、督促のTELがかかってきたこともありませう。

怒る自分も何ら変わりなかつたんだと気づきました。と同時に、年が明けると、なぜあの何ともいえない気持ちにさせられるのか分かりかけた気がします。

### ● 学生時代の感動を大切にしたい

話は少しずれますが、二月になるとあの大学入試のことが思い出されます。国

立以外は大学ではないというような担任から、考えもしないようなところを第一志望にしろといわれたり、「お前の行きたいところは本気で考えるなよ」などという指導のなかでの合格だっただけに、感激もひとしおでした。

その後入学から卒業まで、誇れるほどのことをしたわけではありません。たえ「近ごろの若者は…」と言われても、地のままで生きようとする多くの友人たちに出会えた、妙に心地好い環境に浸っていたのです。

職員としての生活が始まってからは、自分にとって大事な大学時代や、うれしかった合格も、今では毎年の一つの行事（誤解覚悟で書く）他人ごとになってしまった感があるのです。雑誌の類ではありませんが、受験者数や評判などでしか大学を見ていない自分に気づいたので。そうなってしまう自分に嫌悪感をもっているために、年が明けると妙な気分になってしまふのではないかと思うのです。

大学の冬の時代を迎え、単に学生数が減って経営に打撃を受けるよりも、真の高等教育のレベルが保てるかのほうが問題。新堀通也氏は著書のなかでこう述べています。（『大学評価』玉川大学出版会）。大学人はこのことも懸念する必要があるのに、経営のことしか考えられなくなってしまったようです。

### ● 本物の大学づくりに全力投球

昨年、母校で入試課長（現在は総務部長）として、バブルの中心を走っている方と、加熱する入試の現状を憂う教諭の討論記事を見つけました。どちらも一理ありますが、ふと仮面浪人をして、アラカルト入試で合格した級友のことを思い出しました。一浪して某大学進学後、あきらめきれなくて試験を受けたそうです。彼も大学で刺激を与えてくれた一人でした。視点が鋭い。人のことには妙に気を使う、ある意味ではおせっかい焼きでした。就職してからも、倒れた恩師のよ

うな「おせっかいな」大学教授になって、若い人のお世話がしたいと夢を持ち続けているようです。

昨夏、彼の話を聞き、自分の夢を教えられた気がします。自分が味わえた大学時代の気持ち、学生にも感じてもらう大学を創ろう。社会に出てからも、いつでも勉強できる環境を、大学を変えることで創っていこう。

どうしたらそうできるのか、何をしたら良いかまだ分かりません。「まず隗より始めよ」のことわざどおり、身近な環境から改善していきます。

天野郁夫氏が言うように、すでに入試改革が「錦の御旗」の時代は終わったのです。別のやり方で、自分の一生をかけて本物の大学を創りたいです。アメリカの大学院に行こうとしている旧友のところに、届くくらいの大学にするぞ！と今年には希望に胸を膨らませています。

名城大学付属図書館運用課

たて・かずや